

武見太郎先生と生存科学

小泉英明

株式会社日立製作所 名誉フェロー

公益社団法人日本工学アカデミー 上級副会長

インタビュアー：塩野米松氏（作家）

『アカデミーと生存科学』

武見太郎先生（1904-1983）は日本医師会の中に多くの特別委員会を設けて学術的な意味を持った水準を担保できる医師会にしようと思いました。

学術的な組織を抱えて、医療の正しい方向を認識し、科学的に行動できるようにするんだと。武見太郎先生は請われてから3日間考えた末、学問と社会を繋ぐ役割が大切だと結論し、昭和1950年に副会長職に就いたんです。

1957年に後任の会長をと口説かれたのは、戦後の混乱の中で、日本医師会会長と日本医学会会長を務められてきた田宮猛雄先生です。武見先生は副会長時代、GHQ（連合軍最高司令部）から占領下では戦勝国の指示に従えと命令されましたが、負けたのは軍人であって医学者ではないと、独自の医療施策を貫こうとして田宮会長とともに、3ヶ月半後には実質的に解雇されました（正確には辞表を提出）。

しかし1952年には田宮先生とともに復活しましたが、さらに医師会の内部問題で、1954年にも再度辞表を提出しています。

その理由は、医者だけが良くなればよいという職業エゴイズムへの反対でした。「欲張り村の村長になるつもりはない」というよく知られた発言は、代議員会の議事録にも残っているそうです。

当時は、長袖（袖の下に近い意味）という江戸時代に始まった医者を揶揄する言葉があったそうですが、先生ご自身は、GHQの施策の内、米国流医師会のようにという方向には賛成でした。

私も武見太郎先生の「科学的論理と判断を持ち込む」という考えに強い関心を持っています。日本には医学アカデミーがありませんが、中立的にきちんと議論できて、発言できる場がどうしても必要だと思っています。

今、世界のアカデミーで医学を中心にした再編が起こってるんです。

アメリカは、先陣を切って改革をしていて、ザ・ナショナル・アカデミーズは三つプラス1なんです。ナショナル・アカデミー・オブ・サイエンス(NAS)とナショナル・アカデミー・オブ・エンジニアリング(NAE)。それからナショナル・アカデミー・オブ・メディスン(NAM)。さらに実働組織としてナショナル・リサーチ・カウンシル(NRC)。それまでは医学はアカデミーじゃなく、インスティテュート・オブ・メディスンという名前と呼ばれてたんですが、2年ほど前に格上げに近い形になったんです。

私もボードメンバーとしてお手伝いしている国際理工学アカデミー連合(CAETS:注2)には、上記のNAEも含まれますが、最近、インター・アカデミー・パートナーシップの職権ボードメンバー(IAP:注3)となりました。

日本学術会議も一般ボードメンバーとして加盟しています。

このIAPはサイエンスのアカデミー連合だったのですが、今はサイエンス・ヘルス・リサーチの三部門から構成される形に改組が進んでいます。つい最近、ヘルス(メディスン)が表に出てきたんです。

メディスンというのは、従来は一分野だけだったのに、将来を考えるとメディスンが中心になって展望が一つになっていこうという動きです。

まさに武見先生が考えておられたようなこと、すなわち「人間を中心においた時代」が、ここにきて世界的な潮流になってきているわけですね。

そういうことをご存じなのは、医師の方々の一部だけではないかと思うんですね。日本のお医者さん達は、治療に追われて勉強する時間も大変だと思いますし、細い道に技術者としての関心を向けてるように多くの人は思っているといるんですね。患者が望むことは病気を治してもらいたいただけなんです。でも、それだけでしたら修理工場と同じです。武見太郎先生がおっしゃったことですが。

その傾向は医学に限らずほとんどの分野で見られます。

そこには大きく欠けてるものがあるって、私たちがこれから進む方向はこのままでいいのか、もっと大きな視点から人間はどう生きていくべきか、を考えることが必要なんじゃないか。私は大きな転換期に来てると思ってると思います。

最初に述べましたように武見太郎先生は、診療報酬を上げることばかりの欲張り村の村長にはなりたくない、よくおっしゃってました。医者の方々の三分の一は、倫理感も高く真摯な人々だが、その反対も同じだけいる。残りの三分の一はどちらでもない。

でも医者はそれなりの豊かな生活が出来るということも残しておかないと、現実の医療政策としては難しい問題が起こっちゃう。患者にとってプラスなシステムをとろうとすると、現実的な手を打たないといけないんだと。

そういう現実的なことはあるけど、医師会の中に学術的に高いレベルの会議を置いておかなければ、医師会は商売上の組織になってしまう。さらに人間の生命を中心に、すべてを見直すときが必ずくるということを、ずっと前に見越しておられました。そういうことを繰り返しておっしゃってたんですね。

『生存科学』

そして「生存科学」という言葉を残していかれました。

先生は人間全体を心の問題を含めて包括的に扱うものを、今までは科学とは言わなかったが、それを敢えて科学と呼んで、一石を投じてみたいとおっしゃってました。

武見先生はこの後全体がどういう方向へ行くかを、みんなが理解して、具体的に思索として進める段階になるには、まだまだ30年とか40年かかるというお考えだった。いずれ、そうしたことが必ず世の中の最重要テーマになると。

医学という狭い範囲をもっと大きく広げてものをみるべきだ。医学って何のためにあるかっていうことを含めて、そうしたことを提示していったんだと思います。

医学ということすら先生からすると小さな一分野であって、もっと広く考えておられたと思います。

今は、医学の中にもたくさんの細い道が出来上がって、それぞれが独立してより深く細くなっています。脳の問題にしても、化学にしても、分子生物学にしても、遺伝子にしても同じように、得られている結果が大きく、社会学に影響を及ぼすようになりましてから尚更だと思います。

そうなってくると人間とは何かを考えると、それぞれ今までとは大きく違って来てるので、そうした問題を広く議論して欲しかったんだと思います。

武見先生が考えていたのは医学に嵌まりきらない大きいテーマなんです。

ご自身がそれに関係してましたので、医学とか生物が大事かというふうに考えていられたのはもちろんですけど、元々理研で物理学にも興味持って、ご自身でベクトル心電計を実際に開発された方ですからね。

先生のお考えとしては、将来は何も医療にとどまる必要は全然なくて、人間とはなんなのか、人間とはどういうふうこれから暮らしていけば、みんながより良い生存を担保できるのかという、それが生存科学のお考えの一番原点にあったと思います。

STS フォーラム（サイエンス&テクノロジー・フォー・ソサエティ）って聞かれたことはおありですか。参考に

なるかもしれませんので、少しお話ししますね。

このフォーラムは「社会の為の科学技術」ということで始まってまして、15年位経っていると思うんですけど。最初、私はちょっと距離を置いてたんですが、最近立場上出ざるを得なくて、一昨年から出ています。

国立京都国際会館で一週間開催されるのです。世界の人達に集まって欲しいということで、自薦では出られない会議なんです。社会の為の科学技術というテーマですから、生存科学にも近い。大切なNPOの会議だと思いますが、ただどうしても、総理大臣が挨拶されるなど、少し形式的になりがちです。

ノーベル賞を取ったような人達も自分の関係する分野を話すわけです。例えば、今問題にされているAI(人口知能)による情報処理とか、スマートシティの問題だとか、エネルギーミックスの分野とか、クローンやゲノム編集の問題。さらに地球温暖化などの環境問題。さらにIoT(物のインターネット)等々、全分野をいくつか大きく括って、その1分野の中にさらに4、5分野にわかれたものもあります。

最先端の研究分野の話から、それを社会にどう還元するかという事と、世界がどっちへ向かうか、それぞれの立場から話されるわけです。

それは本当に議論するための会議で、それはそれなりに成功してる部分もあると思います。技術の問題と哲学的な基本ベースと両方ですね。

片一方の哲学ベースに成りすぎると、机上の空論になりますから。具体的な、社会で今どういう物が現実にイノベーションとして開発されていて、その最先端がどこにあるか。その議論をベースにした上でその先、我々はどこへ行くのかというそういう枠組みです。そういう場がないわけじゃないんです。

生存科学という言葉を作ったのは100%武見先生です。元になるドイツ語とか英語とかフランス語とかはないと思います。

生存科学に一番似ている言葉ですか？

私は生存科学っていう日本語が余りに先生が上手く付けられたんで、なかなか代わるものがないと思ってるんです。英訳も難しく、おこがましいのですが、私はヒューマンセキュリティ&ウェルビーイング(Human Security and Well-Being)という言葉が武見先生のお考えの生存科学に相当するのではないかと考えています。

生存科学という概念には、武見先生の生まれ育った背景とが、かなり思想の根源として存在していると思います。

叔父様に日蓮宗の上人がいらっしゃるとか、お父様自身が新潟の長岡という世界から見れば非常にローカルな場所の出身なのに、その方が15年間もアメリカに留学してるんです。しかもお母様のお父様というのが富岡鉄斎と非常に近かったとか、そういう環境が、思想を育んだんじゃないかなあと思ってます。

米百俵の故事で知られる所ですから、これはやはり日本人じゃないとなかなか理解しづらいところがあるんです。ただ、これからは日本人独特と思われている仏教観とか神道などが世界でも大事に考える時代に入ると思うんですね。そうすると、精神世界を包み込んだ生存の科学ということも理解される時代が近くに来てるんじゃないかなと、私は感じております。

『武見太郎先生と私』

私事に触れることをお許しいただけるなら、私の妹が武見太郎の息子と結婚しましたので、武見先生は義弟の武見敬三の父親です。武見先生から見ると、私は息子の義理の兄です。

武見先生が、妹を息子の嫁に欲しいと自宅まで武見敬三を連れて来てくださったんです。

妹は自分の夫になる人の父親・武見太郎っていう人がどういう方か全然知らなかったようです。自宅に来ていただいて、初めて、妹は武見先生と話す機会ができたんです。

私は新聞とか報道で拝見してて、何かふてぶてしくて態度の悪いあの人がよりによってわが家に来たという感じでした。

ですが、お会いしましたら、全然そうじゃなかったなかつたんです。

その時に、私は先生から何をやっているのかと聞かれて、今 MRI（磁気共鳴描画）というのを開発していますということを話しまして、MRI の画像をお目に掛けたんです。

そしたら先生はこれこそこれから必要な機械だ。これは X 線と違って、形態と機能が両方見えるから、的確な診断が出来ると大変興味を持たれたようでした。

ご自分が心電図の機械を開発されたことも頭の中にあつてのことだったと思います。

私はまだ 30 歳ちょっとでした。若造もいとこなんですが、それでこの続きの話はうちに来なさいって、お帰りになったんです。

それを機に、頻繁に伺うようになりました。

お会いして話すのは、哲学とか生物学の本質的な話とか、これからの医療で何が必要かというような話題でした。先生は網羅的に話してくださって、残っている私のノートを見ても抜けているところが殆どないくらいですね。

勝手に抱いていたイメージはお目にかかった途端にころっと変わっちゃいましたね。全部払拭されてしまいました。

武見先生に関しては、ある意味で、想像だけでイメージされている方が結構多いんですね。生存科学の議論にしても、逢っておられない方が武見先生の思想はこうだって、決めつけた形というのが非常に多いんです。

私は武見先生に心酔しまして、当時は家族のみんなからは殆ど病気だと言われ続けてました。寝ても覚めても武見先生の話ばかりしてたんでしょう。

ですから私が申し上げていることもかなり偏りがある可能性がありますね。それ程大きな影響を受けました。

『生存科学研究会』

武見先生のところに伺うようになって、一年半後には先生は亡くなってしまわれました。それでも、1 回 1 時間ぐらいが、短いときも含めると 20 回以上、お話をお聞ききすることができました。

そのとき「丁度生存科学研究会というのを作ったが、自分の専門分野と違うものに触れてみたり、勉強するのたまにはいいものだ。君も出てみないか」というふうに言ってくださったので、第 2 回目から末席を汚させて頂いたんです。

いただいた会員番号は 21 番でした。この会は先生が亡くなるまでにも 5、6 回か続いたと思います。

その時のメンバーは本当に中心の方方で、日本医学会総会の会頭を務めた熊谷洋先生などでした。若い方はほとんどいなかったですね。

医師会の勉強会のメンバーとも重なっていたようです。

先生が 25 年間医師会長を務めた間、何度も日本医学会総会をやってらっしゃいましたが、社会の医療をあずかる医師会のトップと学術的な医学を進めるトップはとても近かつたんですね。

ご自身のお考えで、広い分野から選ばれた方々でスタートされてました。私が初めて出ましたら 20 人位、出席者がおられました。

議論の中身は興味深くて、老人の医学を研究している方が、医学の務めはどこまでなのかっていう講義をしましたね。

その先生は、蠟燭に喩えて話をされました。

蠟燭には限られた寿命がある。その蠟燭が風で消えそうになった時に助け船を出すのが医療なんだ。蠟燭を継ぎ

足すのは医学でも医療でもない。そういうふうにおっしゃったんですね。歯止めをきっちりと明確に説明されて、その議論をみんなでやりました。

その問題は今でも本質的ですね。

再生医療にしろ、臓器移植にしろ全部今に続いている問題をみんなで真剣に話し合っていました。非常にレベルの高い議論だったですね。

外国の人も呼ぼうということになって、産業連関表でノーベル経済学賞を受けたワシリー・レオンチェフ先生が日本にいらっしゃっていたので、お招きして「人間が生きていく上に経済学というのは非常に重要だ」という議論をしましたね。

大江精三先生という科学哲学の先生も講演をされています。

科学哲学と科学史の視座から人間の生存というのを考えるということでした。そういう会が生存科学研究会の発端だったんです。既成の分野を超え架橋・融合することが本質だったのです。

ですからメンバーが医学だけじゃないんです。そうした方々がいないと医学自体が、鏡に写らないというふうに思われたんだと思います。

メンバーは、大半は医学なんですけど、半数近くは全然別の分野の方を武見先生が一人一人呼ばれて、それで加えられたということでした。

その時の講演録は残ってます。詳しいものはないんですけども、武見太郎先生が講演されたものはきちんと残したんです。

お亡くなりになる前に、武見先生ご自身が、自分が喋るよと言って講演されたのが4回位あったんですが、その速記録は公表されています。本当に亡くなる数ヶ月前までなさっていたんです。

『ライフサイエンス』

1972年にスイスのバーゼルで「ライフサイエンス」のテーマで初めての学会が開かれた際には、日本からはお一人武見先生が出席されています。

主催のヤーン博士に痛く感銘を受けて、第2回目は武見先生が博士を日本に招いて、小規模ながらご自分で主催されました。

北欧系の発音のために、ほとんど知られていないと思いますが、このヤーン博士の弟子からノーベル生理学医学賞がたくさん出て、武見先生が逝去されたあとに、博士ご本人も受賞されています。

以前から物理の渡辺慧先生や藤岡由夫先生、農芸化学の犬飼文人先生達など自然科学系の先生達が集まってライフサイエンスの研究会的なことをなさっておったそうですが、このバーゼルの会議を機に、日本医師会の特別医学分科会で、ライフサイエンス研究を開始されました。

ライフサイエンスの基礎理論を取り上げたシンポジウムを8回にわたって開催されています。

最後の第8回日本医師会特別医学分科会リポート『ライフ・サイエンスと自由』（日本医師会編 1981年春秋社刊）がわかりやすいのですが、さまざまな分野の方々が集まったのシンポジウムでした。

その講演者や寄稿者は、武見先生が全部ご自分で選んでおられます。

生物学者、哲学者、美術評論家、財政学者、腸内細菌学者、芸術家まで含めた広い分野の方々がそれぞれの研究成果や意見を述べられています。

こうした試みを繰り返すことで、生存科学という山への登り口がいくつもあるんだということを提示したんだと思います。

オリジナリティをお持ちの先生でしたから、完全にご自分で考えたものがベースになっていると思います。ここでは生存科学ではなく、ライフサイエンスという言葉を使っておられました。

議論の末に統一されるということを希望されていたか、私にはそのところは理解が及ばなかったですね。

生存科学という山か山脈かはわかりませんが、どこかがてっぺんかもわからないんですが、登り口はいっぱいあって、頂上というものに向かおうじゃないか、その姿勢が生存科学ということだったんじゃないかと思うんです。さきほど言いました“Human Security and Well-Being”ですね。

ユニークで、高い理想をお持ちの方が、今後の生存科学から端を発した新しい世界の様な物を作ってくださいる形に持って行ってほしい。そういう人達が段々増えてきて、新しい出発点になれば一番素晴らしいと思っていたと思います。

生存科学という言葉自体をどう理解すればいいかが凄く難しいし、それが科学なのか、よくそういうふうに先生方もおっしゃって議論されているんですけども、私は武見先生自身がとりあえずこういう形でやってみよう、そう考えてたんだと思います。それを繰り返しておっしゃってらっしゃいましたから。

『生存の理法』

先生が晩年、人間は「生存の理法」にしたがって生き、理法にしたがって死ぬということをおっしゃってたんですね。そういう意味のことを話してくださいましたし、書いた物も残されています。

生存の理法と書かれていて、それがいろんなところに出てくるわけです。

この生存の理法という言葉には、宗教観とか概念がある訳ではなくて、大げさにいうと宇宙の秩序みたいななかに生命体も秩序を持っていて、その秩序に従って人間は生きていくということだと思います。それは武見先生が直接お感じになっていたことのような気がしています。

理研時代に学んだ物理学とかそういうようなサイエンスの基礎は十分お持ちでしたから。生まれてきて死んでいくのは生存の論理に従っていただけだって思われる部分と、心の問題や社会環境の変化、それに科学という梯子をかけたら、そこから何かが見えるかも知れない。その一つ的手段として生存科学という梯子を用意したんじゃないか、そう感じていました。

先生は慶応大学の内科の教室に残れと言われたわけですけども、自分から飛び出て、理化学研究所へ行ったんです。

理研での研究や議論の厳しさから見たら、今やっている医学というのは全く科学ではないよ。だからきちんと科学的なものの考え方を学ぶ必要があって、そのために理研の方へ移ったんだと。

その時は物理学の黎明期だったから、湯川秀樹さんとか朝永振一郎さんがもう本当に大変な議論をしていた。その中に入れてもらった。そのことが自分の一番の大元なんだと、よく半分自慢話でしてくださいました。

朝永さんや湯川さんたちは素粒子論などで熱烈な議論をしていたそうです。その環境に本当にどっぷり浸かっていたというふうに、ご自身はおっしゃっていました。そこでベースになっていたのは、ニールス・ボーアだと。

世界に幾つかニールス・ボーアの出店みたいなのがあって、その一つが理研の仁科研究室なんだと。量子力学の黎明期ですから、そこらのことはよく理解をされておられておられて、考えの基礎にしておられたと思います。

仁科先生はニールス・ボーアの言葉として「物理学は究極において生命の問題と結合しなくてはならない」と話されたそうです。

人間とは何かを問うときに、心の問題も大きいわけです。そういう意味で精神的なものを扱う場合も、サイエンスの考え方が重要だと。

理研で行われていた議論は科学的論理に則っていた。その方法は、人間全体を包括的に研究する時にも必要だろうというふうに先生はお感じになっていました。

一般には科学とは言わないけれど、精神的な物まで含めたものでも、敢えてそれを科学と呼んでみたいと。それで生存科学というのを私は言い出したんだと、そういうふうにはっきり仰ってました。

『進化論と原始仏教』

武見先生がおっしゃってたのは、科学の知識を含めた上で、一番のベースはダーウィンと必ずしも一緒ではないですが、進化論でした。

自分の頭の中で進化の話をも自分なりに理解しているつもりだともおっしゃってましたね。それともう一つ、考え方の基礎になっていた精神性は、宗教の方から受け取られているとお思います。

私には、仏教を理解する上で原始仏教が大事なんだと。原始仏教をしっかり勉強しなさいとおっしゃってました。

日蓮宗に固執しておられたということはありませんでしたね。日蓮宗っていうのは偶々叔父様が日蓮宗の上人だったという環境から来たのであって、先生自身とりわけ日蓮宗をと思っている訳ではなかった。もっとお考えは凄く広がったですね。

武見先生からは直接伺う機会はなかったんですが、何故原始仏教までさかのぼれと言われたのか、私はずっとそれを考えてきました。

西洋や東洋のどの宗教も、長い間にはいろいろな修飾がついてきます。仏陀は答えなかったと古い経典には書かれてる項目があります。

無記あるいは捨置記と言われる項目です。

仏陀は他の宗教から、死後の世界をあなた理解しているかということをお問われました。ほとんどの宗教は死後の世界を大事にしていますから。

仏陀はそれについては何も答えなかった。

答えなかった理由は、今、現実にはこの社会にはたくさんの解決しなくてはいけない問題がある。そちらに全力で取り組むべきで、現実には直結しない話には私は興味ない。そういう言い方をして答えなかったということです。

原始仏教は哲学に近くて、宗教としてはちょっと異質であって、いわゆる宗教じゃないと。そこが武見先生の一番言いたかったことのように思ってます。習慣とか慣習として大切にすべき部分は、現在の仏教の諸派についてもあるけれども、本質は原始仏教で仏陀の考えた事だと。

それは哲学であって、その前のインドの哲学というのはきちんと論理学もあって、インドの論理学あるいはヴェーダをベースにした哲学があると。それを先生はお考えになっていて、生存の理法とおっしゃたんだと私は感じています。

ですから理法みたいなことをお話になる時でも、インド哲学の因明論から論理というのを引き出していました。インド哲学をきちんと勉強されて話して下さっていたんです。

先生はネーミングが上手でいらっしゃったから、「未来からの反射」ってよく使われますけど、あれも素晴らしい言葉です。

武見先生がはっきりおっしゃったんですが、これは因明論から取ったんだと。

因明論の中に後比と前比という概念がある。過去をしっかりと振り返って、そして今度はそれを前へ、前の方へ今度は持って行くんだと。そういう考えが因明論。

後比と前比は重要な概念だと。

最近になって、よくいわれるイノベーションのためのバックキャストिंग。これを含んでいることはすぐ分か

りますよね。

これは、1990年代に北欧、スウェーデンで政策に使われるようになった言葉ですが、フライフィッシングの時に、リール竿を一度後ろへ引き、そして前へ投げるときの後ろへ引く動作を指すことばです。

武見先生の「未来からの反射」の方が、はるかに正確かつ簡潔に概念を表現していると感じます。

講演の時には細かいことを武見先生、一切言われたいですね。分子生物学を持ち出して「未来からの反射」ってぱっとおっしゃるから、後はみんな考えなきゃいけない。言われて35年以上経った今頃になるとみんな関心を持ちますが、当時は何のことかわかりづらかったと思いますね。

『ハーバード講座』

生存科学の議論が進んだその後、先生はそれを日本だけでなく世界的な動きにしたいと考えてたんです。それでハーバード大学に武見コースを作るということで、医師会関係とか製薬会社からもいろいろ寄付してもらって、公衆衛生学にプロフェッサーシップをおつくりになったんです。

何故かという、先生のお考えに大変共鳴されていたのが、公衆衛生学の大学院のディーン（学部長）のハイアットという方だったんです。日本では医学部の中に入っちゃってますけど、アメリカの場合はちゃんとした学部です。

武見先生の思想というのは海外の人が理解するのは、仏教的な側面があったりしましたから難しいんじゃないかと思ったんですが、ハイアット先生は理解されておられたようで、武見先生が亡くなられた時も墓参りに来られましたね。それくらいに武見先生のお考えに私淑していたという感じでした。

ハイアット先生の後任のディーンであったファインバーグ先生も素晴らしい方でした。先生が突然、ハーバード大学附属病院の院長を辞任されたと聞き、びっくりしてハーバード大学にでかけて直接理由を伺いました。

先生のご専門は、小児医学でしたが、ハーバード大学医学部と附属病院群があるボストンでは、低所得層の小児医療はまったく行き届かずに、幼児死亡率が高かったのです。

ご自身が現実社会の足元を見ていなかったと気づき、地元の小児医療に専念されることを決心されたと話してくださいました。

ハーバード大学は、中身よりも名声や名誉を求める人々も少なくないと感じていますが、このように素晴らしいディーンの方々と、武見先生は意気投合されたのだと思います。

先生は海外で次の世代を育てていって、世界の医療の問題の解決にも寄与したいというお考えがあった。その中で生存科学というのも地に足がついた形で発展していきだろと、武見先生はそう考えられていたように感じました。

武見先生は、生前から医療費負担が20~30年後ぐらいからおかしくなるだろうって言ってました。高齢化によって人工のピラミッドが変わる。それが日本の場合には非常に深刻な問題になるから今から考えておかないと、倫理的にもおかしい医療になってくると。

高齢者をほっておけという話になりかねないと。

だからそのところに手を打つには方法は一つしかなくて、科学的な予防というのをきちんとやることだと。

当時は予防に付いての研究も少なければ、そういうような動きもない。そういうものを研究する必要が絶対的にあると。

武見先生はおっしゃっていたのは具体的な先制医療の話でした。

前向きコホート研究を含めた本当の意味の先制医療をやらなくてはいけないわけですが、それが日本はやっていない。それをずっと最初から危惧されていたんです。

日本の医療政策については深刻な少子高齢化を見据えて、そういう中で武見先生は非常に早い時期に羅針盤のよ

うな形で方向性を示されたですね。

今になるとどれも理解しやすいし、「不安定の中の安定」や「医療資源の最適配分」なんていう言葉は武見先生が3、40年前から言われていることです。

私におっしゃったのは、医療の世界での倫理への危惧でした。

墮胎の問題が表面化しない倫理状況のままで、高齢化社会を迎えるととんでもなく非人道的な結果が生じることもおっしゃいました。

『倫理』

生命倫理の問題と生存科学は、私は殆どコインの両面位近い話ではないかと思っています。今世界が大きく変わりつつあって、倫理が極めて重要になり始めています。

今、何で倫理の問題かという、新しい課題が沢山あって、そこがまだ研究されていないんです。研究されていないということは理解もされていないということです。

私に関心を持っているのは、動物の進化の過程で、今のように情報機器を扱う時代は全くなかった事実です。

ですから脳の構造からして、そういうものに適応出来る状況にないんです。

情報機器とかインターネット含めて、それらが急激に極端に普及してしまって、人間の脳の進化と、脳を取り巻く環境との関係に非常に大きなアンバランスが生じてきています。ネット社会になって、逆に人と人との間も遠ざかってしまいました。そこで倫理の問題が極めて危ない状況になっていますね。

元々、医学は技術として生まれてきたものです。でも、技術だけではまずいわけで、他のものも取り込みながら発展する必要があるんです。そこに倫理という問題が浮かんできています。

世界的に安定性がなくなった時に浮かんできたのは人間の尊厳だと思います。これが侵されていることをみんなが痛感していると思うんですね。だからこそ生存科学の問題と倫理を、今一番のテーマとしてあげようよと世界中が思っているんじゃないでしょうか。

私はそういうふうに感じています。

その倫理の問題がいろいろ取り上げられているんですけども、まだ十分ではないと考えています。

そうしたなかで、深く議論されていて水準が高いのが、バチカンの科学アカデミーですね。多分世界で一番高い水準だと思います。

バチカンの科学アカデミーが一番古い歴史を持っていて、創立四百数十年になります。リンチェイ・アカデミーとして出来たのがガリレオガリレイの頃なんです。

ノーベル賞を持っていないとなかなか会員になれないんですが、会員は終身制で約50名のアカデミッシャンが、今の世界で喫緊の解決すべき事項は何かというのを議論するんです。その時、誰が一番それについて議論の適任者かを選んで、世界からさらに数十名をバチカンが招聘して、ワークショップを数日間やるんです。

私も今までで4回出席させて頂いています。

その議論の中身はケンブリッジ大学の出版局とかスプリングー社から出ます。きちんと議論をして明確な方向付けをして、現在は、フランシスコ教皇が世界に発信する内容の裏打ちをしているんです。

トランプ大統領がバチカンを訪れた時にローマ教皇は環境の本を贈りました。それはバチカンの科学アカデミーが徹底的に議論してきたテーマでした。トランプ大統領は、宗教家は環境の問題とか経済の問題に口を出すべきではないと言っていたのですが、バチカンは社会科学アカデミーも持っていて、ノーベル賞クラスの人達を入れて徹底的な議論をやっているんです。

前のヨハネパウロ2世の後からは益々サイエンティフィックになっていて、ガリレイの事件についてもはっきりと陳謝しました。今は進化論についても、アメリカなんかは進化論を教育の中で認めない州がいくつもありますけど、バチカンも、進化論はもう単なる論以上の物で、生物学的な仮説として公に認めるという声明をきちんと出しています。

皮肉なことに、フランシスコ教皇がバチカンアカデミーの結論をトランプ大統領に贈った直後に、アメリカはCOP 21のバリ協定からの脱退を表明したんです。

アカデミアをつくったのは古代ギリシャのプラトンです。40歳頃に、ソクラテスの意志を継ぐ形で、国を治める人材を作る為にアカデミアを発足させた。そこには若いアリストテレスも入ってきて、プラトンが80歳で亡くなるまで一緒に学んだ。

私はアカデミーの原点に世界中のアカデミーが戻って、もう一度考えてみるべきだと思います。

アカデミーの一番大事な役目は羅針盤です。

宇宙論と倫理という組み合わせを中心に置いていたんです。

絶対的な自然の存在みたいな正に理法ですね。呼び方をどうやってもかまわないというような最も偉大なる存在という形で、それが多分武見先生の理法とも繋がっていくんだと思いますね。

そうしたことを目指すアカデミーが欲しいし、是非日本でもつくるべきだと思います。それでSTSフォーラムの話在先ほどしたのですが、生存科学というテーマを十分に自由に議論し、必要があれば政府にも国際的にも発言していくアカデミーが今こそ必要だと、私は考えています。

倫理のことですが、来日したダライラマに招かれた際、「倫理とはなんなんでしょう。これが自分でわからないので教えて頂きたい」と質問させて頂いたことがあります。ホテルのお部屋にうかがったのですが、ダライラマは30秒位黙って考えておられたですね。それで「ウォーム・ハーティドネスあるいはコンパッション」(warm-heartedness, or compassion) って言われたんです、「温かな心」って(注4)。

たまたまですが、偉大な哲学者、中村元先生の絶筆になった本が『温かな心』なんです。副題が「東洋の理想」です。やはり仏教の本質がそこにあるという指摘だと思います。

私はダライラマがおっしゃったことと、偶々、中村先生が死ぬ直前に遺された題名が一致しているのがとても興味深くて、「温かな心」っていうのが、人間がみんな生きていく時にやっぱり基本的に一番重要ではないかって感じました。

武見先生からは、それを私は伺った記憶がないんですが、お考えになっていたことは温かな心に繋がっていくんじゃないかなあと、そんな感じがしますね。

こうしたことをきちんと議論してほしいというために、生存科学という大きな入れものを言われたんだと思うんですね。

私も武見先生にお目にかかって、周囲からは殆ど病気って言われましたが、一番魅力だったのは先生の温かな心だったというふうに感じますね。

いろんなところから山の裾野からスタートして辿り着いた時に旗に書いてあるのはその言葉かもしれませんね。

(注1) 日本医学会

1902年に開催された第1回日本総合医学会に端を発する医学系学会が加盟した学術組織である。1947年の第12回総会で、日本医学会の常設が決議され、1948年に改組途上にあった日本医師会と合体した(武見太郎先生は1950年に日本医師会副会長、1957年に会長に就任した)。日本医師会定款には「日本医師会に日本医学会を置く」と規定され、「医学に関する科学および技術の研究促進を図り、医学および医療の水準の向上に寄与する」ことを目的とするとされる。現在は129の分科会(学会)から構成されており、今回の第30回日本医学会総会(4年毎)は2019年に名古屋で開催される。先回の第29回日本医学会総会(2015年京都)では、横倉義武日本医師会長、高久史麿日本医学会会長が冒頭に講演。また、井村裕夫会頭が編者となり主題を分かり易く纏めて『医と人間』(岩波新書)を記念出版した(小泉英明もその出版の一章を担当)。

(注2) CAETS

International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences(国際理工学アカデミー連合)は、26カ国の工学系アカデミーが加盟している。定款の基準を厳密に満たす一国について一代表アカデミーが、評議会の審議とオブザーバーの期間を経て加盟が承認される。公益社団法人日本工学アカデミーは、日本を代表する理工学アカデミーとして、1990年にCAETSへの加盟が認められた。

(注3) IAP

Inter Academy Partnershipの略号であるが、ここ数年で行われている改組の前には、Inter Academy Panelと呼ばれていた。現在は、IAP for Science, IAP for Health, IAP for Researchの3部門から構成される130のアカデミーの比較的緩い連合である。IAP for Researchには、日本学術会議が一般ボードメンバーを務めている。また、(注2)のCAETSは職権ボードメンバー(Ex-officio Board Member)を務めている。

(注4) ダライラマ

ダライラマ(Dalai Lama)を巡っては政治紛争が絡むため事前に外務省と検討した。お招きであること、科学と宗教の対話のみであることから問題なしとの結論となった。